

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2371501111		
法人名	株式会社 ひかり倶楽部		
事業所名	グループホームうたたね 2F		
所在地	名古屋市名東区高針1丁目801番地		
自己評価作成日	平成30年8月11日	評価結果市町村受理日	平成31年1月15日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhiw.go.jp/23/index.php?action=kouhyou_detail_2018_022_kani=true&JigyosyoCd=2371501111-00&PrefCd=23&VersionCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人『サークル・福寿草』		
所在地	愛知県名古屋市中区三本松町13番19号		
訪問調査日	平成30年9月5日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

精神疾患が重い方、生活保護の方、医療行為が必要な方など、さまざまな方の受け入れる体制を整えている。日中は、看護職員が在中しており、医療的ニーズにも対応できるようにしている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

当ホームでは、認知症高齢者の中でも医療依存度の高い方や精神疾患の方の受け入れも行われており、管理者をはじめ複数の看護師を職員して配置している。現状、利用者の半数以上の方が重度の状態でもあるため、日常生活の中で利用者が活動等に参加する場面は少ない状況であったが、ホームでは新たな取り組みとして、日常生活の中でユニット合同でレクリエーションを行う取り組みを実施しており、利用者の楽しみと機能訓練にもつながっている。レクリエーションの際には、併設している障害者の方が生活している有料ホームの利用者も一緒に参加しており、相互の交流の機会にもつながっている。日常の支援についても、職員間で利用者への対応を共有できるように、ホワイトボードを活用して支援内容を記載する等、利用者一人ひとりに合わせた支援につながるような取り組みを継続してい

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている。	玄関先やフロアの見える場所に掲示し、理念を共有して実践につながるように心がけている。	利用者が毎日の生活を安心、安全に過ごしてもらうことを目指した内容の理念を掲げており、ホーム内への掲示も行っている。他の介護事業所での受け入れが困難な方も生活しており、職員間で検討を行いながら、理念の実践に取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している。	日常的な交流はないが、散歩時に挨拶をしたり、近所のオムツの業者から利用者様のオムツを購入している。地域の方が、ボランティアで書道を教えに来て下さる機会もあり、交流をもてるように努めている。	地域の方との交流については、中学生の職場体験の受け入れが行われているが、今年度に入り新たなボランティアの方の訪問が実現している。また、ホーム便りを玄関に掲示する取り組みも継続している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている。	現時点では地域の人々に向けて活かしてはならないが、玄関先に広報(写真)を貼ったり、運営推進会議にて地域の方も参加されているので、施設の事を知ってもらうようにしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている。	2か月に一度、運営推進会議を実施し、現状報告、困難事例を発表している。参加者の意見もいただきサービス向上に活かしている。	会議の際には、利用者の状況を詳しく報告していることで、出席者にホームへの理解を深めてもらう取り組みが行われている。また、会議は夜間の時間に開催しているが、地域包括支援センター職員の出席が得られている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる。	役所へ行った際には、最近の様子を伝えるように心掛けている。生活保護の方が多い為、何かあれば連絡、相談をし協力関係を築くよう取り組んでいる。	ホームには生活保護の方の受け入れが行われており、困難事例等に関する情報交換等が行われている。また、地域包括支援センター職員とも運営推進会議の機会や随時の情報交換の機会をつくっている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	不審者問題、エスケープ等ある為、玄関先の施錠は行っている。拘束については、危険を伴う拘束のみ、家族様の承諾を得て行っている。その際には、勉強会、経過観察、状況報告を必ず実施するようにしている。	身体拘束に関する対応については、医療依存度の高い方が生活している現状もあり、利用者の状態等にも合わせて対応している。各ユニットのフロア内には施錠を行わない対応をしており、利用者に合わせて対応が行われている。	ホームでは、医療依存度の高い方や精神疾患の方が生活していることもあり、利用者への対応が困難になることもある。身体拘束を行わない取り組みについて、職員間の検討を深める取り組みにも期待したい。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている。	職員が感情的になっている際は、他の職員が代わりにケアに入ったりと、職員同士でも注意を払っている。日々の不適切ケアを職員間で話し合い、虐待につながらないように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している。	代表者が研修に行き、その他職員は資料に目を通し各自勉強するが、具体的な内容までは理解できていない。今の現状では、利用困難な方が多い為活用できていない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている。	入所前には、必ず重要事項、契約書に対しての十分な説明をし、利用者様、家族様の理解を頂くよう配慮している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている。	面会時や、運営推進会議では家族様とのコミュニケーションを図るようにしており、意見を頂いた際には反映できるよう努めている。	利用者、家族からの要望等については、内容などに合わせて、ホーム管理者の他にも法人代表者も対応する体制がつけられている。また、昨年度から開始したホーム便りの作成を継続しており、家族がみえる方には情報提供が行われている。	ホームでは、利用者と家族との関係継続が困難になっている方も生活しているが、ホームからの働きかけを継続しながら、可能な限り、家族との関係が継続することを期待したい。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている。	毎月の施設内会議にて意見交換し、設備や備品購入案があれば提案し、法人内の会議で検討する機会がある。必要に応じて個人面談も行っている。	職員が両ユニットで情報を共有できるように毎月のユニット合同での職員会議が行われており、意見等をホームの運営への反映につなげている。また、日常的にもユニット合同でのレクリエーションを通じた職員間での情報交換も行われている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	代表者が訪問することは少ないが、訪問された際には職員に声を掛け状況の把握に努めている。職員が仕事のやりがいを持てるよう、担当決めをし実践したりと各自が向上心を持てるように考慮している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている。	職員の能力に合わせ研修の機会を設け、社内研修での発表、報告ができる環境を整えている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている。	外部の研修に参加する事で同業者と交流する機会があり、意見交換等を業務の参考にすることもあり、サービスの向上につなげている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている。	出来る限り本人の要望に添えるように耳を傾けてはいるが、実際には希望に添えない現状もある。環境を大きく変えずに不安を最小限にするよう配慮している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている。	家族様との面談の際、納得していただけるまで話を傾聴し、安心していただけるよう対応している。実際には、家族疎遠の方が多く一部の方となっている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている。	グループホームであるが、自社の施設に適しているか、その人の状況に合わせたサービス提供ができるよう対応している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている。	介護や援助だけではなく、本人の能力に応じた家事等に参加してもらうよう努め、QOLの向上にも目を向けている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている。	面会時には、利用者様の普段の様子を報告し、少しでも安心していただけるよう心掛けている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている。	馴染みの人や場所は、昔から通院している病院など顔見知りがある環境との継続ができるように支援している。	馴染みの方との交流は困難になっているが、親族との関係を継続している方も生活しており、ホームへの訪問時には利用者との交流が行われている。ホームでは、困難事例として受け入れている方や身内と疎遠の方が多いため、関係継続は難しい現状でもある。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。	フロアでの座る配置などを考慮し、状況に応じ職員が間に入るなどして孤立することのないようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている。	施設を移動するより、亡くなられる形で契約が終了する事が多い為、関係性は殆んどないが、契約終了しても、運営推進会議に参加して下さる家族様とは関係性を保っている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している。	入所後本人の様子を観察し、生活習慣、生活履歴から職員で話し合い、できる限り本人の意向に添えるよう検討している。しかし、安全面などで希望に添えないこともある為、代案を検討して支援を行っている。	日常的に利用者に関する情報を職員間で共有することができるように、申し送りノート以外にもホワイトボードを活用する取り組みが行われている。また、日常的なレクリエーションを通じて職員が集まる時間をつくり、利用者に合わせた支援につなげている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている。	入所前に本人、家族様から話を聞く機会を作り、それまでの相談員等から情報を得られるよう努めている。実際には、病院、他施設からの移動の方が多いため、サマリーや他施設からの情報がほとんどである。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている。	様子、状態観察したことを会議で話し合い、一人一人にあったケアをケアプランをもとに行い、ケアの統一に心掛けている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している。	状態の変化などに合わせてケア会議を行い、職員同士で意見をだし、現状に合わせた介護計画を作成している。	介護計画の見直しを6か月で実施しており、毎月の職員会議等を通じた話し合いも行いながら、6か月でのモニタリングを実施している。また、ホワイトボードを活用した職員間での共有の他にも、記録用紙に番号を記載する工夫も行われている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている。	日々の記録をケアプランに添って記録している。会議録や申し送りノート、チェック表でケアの統一共有をしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	法人内の他施設との交流をもち、レクリエーションや行事の参加ができるよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している。	利用者様が地域資源を把握することは難しいが、作品作りなどできる範囲で行い楽しめる環境作りができるよう支援していきたい。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	往診の医師はいるが、それ以外の専門医(精神科)は馴染みの病院へ通院している。何かあれば直ぐに医師へ連絡し、報告、相談ができるようにしている。	ホームでは管理者をはじめとして、複数の看護師を職員として配置する体制をつくっていることで、ホーム協力医との定期的な訪問の他にも、随時の連携が行われている。また、利用者の身体状態等にも合わせて、複数の医療機関との連携も行われている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している。	日常的に気がついた小さな変化でも、口頭やメモなどで必ず看護職へ報告できるようにしている。その際は、看護職の判断で主治医へ連絡し相談している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	出来るだけ関係を持っていた大きい病院へ入院などができるよう、普段から受診した際には情報を提供している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる。	主治医、家族様とは終末期においては話し合いを行う。家族様には、ターミナルケアに対する同意書ももらったり、状態によっては早くから主治医に相談している。	利用者のホームでの看取り支援にも取り組んでおり、複数の方がホームで最期を迎えている。利用者の中には医療依存度の高い方も生活しているが、職員間で利用者への対応を確認しながら、ホームでの生活が継続できるように取り組んでいる。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	定期的に勉強会を行ったり、緊急時のマニュアルが常に見れるように職員に周知してもらっている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている。	消防の定期的訓練を年に2回行い、新しい職員も出来るように対応している。地域との協力体制は整っておらず、今後築いていけるよう地域との交流を深める必要がある。	年2回の避難訓練の際にはユニット間で連携した対応ができるように、日常的に職員間で利用者の身体状態等の情報を共有できるように取り組んでいる。また、備蓄品については、共用スペースの他にも、利用者の居室内にも保管する取り組みが行われている。	ホームには移動が困難な身体状態の方が生活していることもあり、非常災害時における利用者の避難が困難な状況でもある。職員間で連携した取り組み等、ホームの継続的な取り組みに期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている。	排泄の確認、入浴時などプライバシーのあることは、他に聞こえないよう配慮に心掛けている。	利用者に対する職員の言葉遣い等については、状況などに合わせて管理者からの注意喚起等の対応も行われている。利用者の中には対応が難しい方も生活していることもあり、職員間で利用者に対する対応を検討する取り組みも行われている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている。	出来る限り本人の希望や思いを聞き入れ、本人で選択できるよう質問や声掛けを働きかけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している。	一日の流れは施設によるものに左右されるが、その中でも本人の様子を見ながら、その人に合わせたペースで過ごせるよう支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している。	2か月に一度美容院が訪問しカットをする際は本人の希望に添うようにしている。毎日の服については、希望があれば聞き入れるようにしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている。	能力的に食事の準備などは難しいが、テーブル拭きや、お皿拭きなどできる方には参加して頂いている。	食事は、関連事業所のキッチンと外部業者から提供を受けているが、ミキサーやトロミ等の対応はホーム職員により行われている。現状、職員による食事介助を受けている方が多いが、食器類を工夫する等、家庭的な雰囲気づくりにも取り組んでいる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている。	本人に合わせた食事形態で、刻みやミキサーなどで対応している。状態の変化によっては、職員同士で話し合い、その都度対応できるようにしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている。	毎食後口腔ケア誘導で行い、自身で出来る方はやって頂き、職員が介入して仕上げを行う。義歯の方は、外して洗浄してもらっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている。	個人の状況を見て、できるだけトイレ誘導する様努め、パットやオムツを使用してもトイレに座る習慣をつけ、排尿間隔を促すようにしている。	利用者が可能な限りトイレでの排泄を継続することができるように、状況に合わせて職員複数での介助も行われている。また、複数の看護師が職員として配置されていることで、医師と連携しながら排泄に関する医療面での連携にも取り組んでいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる。	排便状況を把握し、水分量の配慮を行っている。できるだけ動く機会を作り、便秘予防に取り組んでいる。食事は、配食の為工夫はできていない。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている。	特に希望がない為、固定の曜日、時間になっている。拒否や体調の状態によっては、曜日や時間を変更し対応している。	身体状態が重度になり入浴が困難になっている方についても、週3回の入浴を継続することができるように、職員複数での入浴介助が行われている。また、ホーム内にリフト設備が備えられてあり、重度の方も浴槽での入浴が可能である。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している。	昼夜逆転にならないよう日中の活動量を増やしたり工夫している。リビングには、ソファがあるので休息される方は移動してもらっている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている。	ケース記録には、薬の情報を保管し常に確認できるようにしている。服薬については、誤薬を防ぐため二重確認を厳重に行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている。	レク活動や、趣味活動など、本人の希望や能力に合ったものを提供し、新しい事へも挑戦できるように支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している。	家族や地域の協力のもと外出することはないが、施設職員と、散歩やドライブ、時には喫茶店へ出掛けたりと外出機会は設けている。	利用者の身体状態等から、外出行事の実施は困難になっているが、昨年の秋には、職員で準備を行った上で利用者全員で東山公園への外出行事が実現している。今後については、利用者の身体状態等にも合わせて外出の機会をつくっていく方針である。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	お金の管理ができる人は現状ではない為、施設で管理している人がほとんどである。買い物があれば、職員が代行で行う事もある。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	家族様が居ない方がほとんどで、家族様がいる方でも希望がない為支援していない。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている。	リビングには季節の飾りをしたり、毎月の行事で季節感を味わえるように工夫している。食事をするリビングは、照明を明るくし、室温などの温度調整にも配慮している。	ホームは建物の2階と3階に開設されていることで、リビングは採光と風通しの良い空間となっている。日常的なレクリエーションを通じて飾り付けが増えており、利用者が毎日を穏やかに過ごすことができるような配慮にも取り組んでいる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている。	利用者様の座る位置や、リビングのソファで利用者様同士で過ごせるように配慮をしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	居室には個人のタンスが置けるようになっており、使い慣れたものがあれば利用して頂いている。個人に合わせ、ベッドや床で寝るなどの対応をとっている。	居室内は広く、収納スペースも確保されているため、車椅子の方も居室内でゆったりと過ごすことができる。利用者の状況等もあり、シンプルな雰囲気のある居室が多いが、利用者の中には馴染みの品々を持ち込む等、希望等にも配慮している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している。	建物はバリアフリーで過ごせる環境になっており、居室入口に顔写真、名前を貼り、トイレ扉にも目印などで分かりやすく工夫している。		